

「在渝日記」

タイトル	「在渝日記」(明治 32 年 1 月～34 年 2 月)
著者名	能海 寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 26 号
ページ	75－101
発行年	2021.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年 5 月 18 日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12 歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の 34 年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

『在渝日記』

著者 能 海 寛

○玄奘三蔵 本名は煒、姓は陳氏。漢の太丘仲弓の後也。兄素出家す。乃ち兄に従て長安に行き莊嚴寺に住す。又本望に非ず。劔閣を鑿へて蜀都に達す。『阿毘曇論』、婆婆の『廣論』等を学ぶ。一聞を忘れず。武徳五年、21才、私に惟らく。学は経遠を貴び義は疎通を重んず。一方を鑽仰するも探蹟を成さずにと別を告げて江硤を下り荊州、楊外等を経て、北は深の所に達し慧林に従て「雜心論」を聞き、道岳に従て俱舎を学ぶ。貞観3年冬、闕に詣て表を陳す。帝允さず。奘私に原州より遁れて玉関を出つ。同7年中、印度に至り大乘の居士に遇ひ瑜伽師地を受く。王舍城に入つて那蘭陀寺に止り、戒賢論師に従て瑜伽唯識の宗旨を受く。留まること10年。貞観19年正月京師に至る。長安の留守房玄齡奏す。翌2月儀鸞殿に見ゆ。帝曰く師能く命を委て、法を求め群生を利す。朕甚だ嘉みすと。特奏して曰く、西域に獲る所の梵本『経論』675部乞う。洛陽嵩山少林寺に於いて、国の為に宣訳せんと。帝曰く朕頃、皇太后の為に弘福寺を創す。彼地に於て訳訳すべしと。因つて平章房玄齡に勅な専ら監護せしめ、資備の所須一に天府よりす。貞観22年6月、帝、奘新訳の経『大唐三蔵聖教』の序を製す。皇太子之を觀て、又『述聖記』を撰す。顯慶4年10月、玉華宮を以て寺と為し、先帝を追崇す。奘に詔しめ之に居られむ。玉華に於て『般若経』を翻す。麟徳元年2月、奘弟子大乘光に命じて新訳の『経論』75部、1,335巻を抄録せしむ。又門人をして像を造くれしめ齋を設けて衆と辞決し左右をして弥勒如来を念せしむ。初5日中夜、右脇安臥して逝く。寿65。帝朝を輟む。3月、勅しめ金棺銀槨に斂しめ。4月、涯の東原に塔す。『瑜伽唯識』の宗旨を窺基に授く。

○南山道宣律師 姓は錢氏。丹徒の人。12ヶ月胎に在り。四月八日誕す。16才出家。隋の大業年中、智首律師に従て受具す。習律す。聴くこと一偏方に修禪を議す。武徳七年、迹を終南倣掌の谷に晦ます。西明寺就るに於て詔しめ上座に充つ。奘三蔵と同止る共に訳す。『法門文記』、『廣弘明集』、『続高僧傳』、『三寶録』、『羯磨戒疏』、『行事抄』、『義抄』等220余巻を撰す。毘沙門律師を擁護し佛牙宝掌を授く。乾封2年10月3日死す。寿72。

○慈恩大師 釈窺基。字は洪道。姓は尉遲氏。京兆長安の人。貞観22年、年17才、勅を奉しめ奘師の弟子と為り大慈恩寺に入る。奘師に事へ五竺の語を学び、25詔に応しめ、訳経す。後、五台山に遊び太行に登る。西河の古佛寺に光を見、弥勒上生涯を得、大疏を造る。本寺に帰り永淳元年11月13日、慈恩寺の翻経院に寂す。樊村の北渠に葬り三蔵奘師の塋に柏す。

○義浄三蔵 字は文明。姓は張氏。范陽人。法頭の雅操を仰ぎ玄奘の高風を慕い西域に遊んと欲す。咸亨2年、齡37、発足し番禺に至り同志数10舶に登らんとす。余皆[□]す。浄孤行す曾長礼を加へ遂に鹿苑祇林に至る。25年を経、30余国を歴て、天后の証聖元年仰夏河洛に帰る。梵本『経律論』を得る。四百部、舍利300粒、天后親く上東門外に迎へ勅め佛授記寺に安置せしむ。初め干闥の『三蔵実夫難陀』と『華嚴経』を訳す。後、自ら書訳。庚子、長安に至り福先寺及雍京の西明寺にて『金光明』、『最勝経』、『金剛般若』、『弥勒成佛』等を訳すこと廿部。北印度の『沙門阿彌眞那』梵本の義を証す。天后聖教の序を製す。神竜元年、東洛内道場にて孔雀王経を訳す。帝崇しめて『大唐竜興三蔵聖教』の序を製し、洛陽の西門に御しめ、群官に新翻の経を宣示す。2年、浄駕に随て雍京に帰る。翻訳院を大薦福寺に置き之に居る。3年、詔しめ内に入る。九旬、座夏す。薬師瑠璃光佛本願切法経を訳し、帝手自ら筆受す。永隆元年、大薦福寺にて『戒経』等20部を出し、又曇雲2年、神咒等を翻す。以上都て、56部、230巻を翻出す。又別に『大唐西域求法高僧傳』、『南海寄帰傳』、『内法傳』等を撰す。『三蔵口偏』に律部

を改さむ。先天 2 年、卒春秋 79、法臘 59。

玄奘天竺に遊ぶ	貞觀 7	西曆 633
義浄天竺に遊ぶ	咸亨 2	671
善無畏唐に来る	開元 4	716
金剛智不空唐に来る	同 8	720
武宗佛を禁ず	会昌 2	842

○支那の農業

1. 四川省農業
2. 西藏農業
3. 陝西省の農業
4. 甘肅省の農業、附新疆省の農業
5. 青海省の農業

以上は、支那内地の農業につき予の正しく見聞せる所なり。予はまだ農学を修めず、只日本に於ける農業を見て、支那内地に入れば其の見聞する所の異同を発見す。是れ、予が眼耳に触るるままに随て之を記するに過ぎず。

○四川は水田多きも日本に比べ暖気なると田地の深きとに由るものか耕作には悉く水牛を用ゆ。水牛は軀大にして日本の牛に比せば殆ど 2 倍なり。而も至て無為にして人に害をなさず。小兒と雖も之を曳き先きに立ちて曳き、或は背に騎る。少しも害せず。又夏の炎天には好んで水に入り、只頭を水上に出して遊泳す。其力も常の牛に勝るものの如し。隋て、其食物も常の牛の 2 倍を要すべし。牧糧は常の牛は同様なり。

○道光年中頃までは阿片の吃者は只上等人種のものに限られ、其数甚だ少なく。又外国、印度辺より輸入するものにして高価なりしも、ここ 2、30 年来は、其吃烟者、年々に増加し来り。今や 10 人の男子中 6、7 人の割合となる。但し女子は多く吃烟せず。10 人の女に対する 1 人位はあるべし。女子は多く内に入りて、人と交らざる故、実の所分からず。如氏、阿片の盛になるに従て、輸入にて到底満足せず。而も、其阿片は四川の如き暖地には非常に適するを以て之を栽植するもの年々に増加し、今や田畑の 6、7 部は又阿片園に化するに至り。春 4 月の頃、四川内地を旅行するものは極楽の庭園にでも遊歩する如く、四方八方、芥花ならざるなり。或は白く、或は赤く、或は紫、或は紅白の班。或は大ある市は小。種々雑多。到底日本桜花の節とも、この四川の花園に及ばざる万々成都のやや東、簡州近方の如き満田芥花の中を行く。満目錦色ならざるはなし。芥子花とは何ぞや。即ち、是阿片花なり。花終りて、芥子坊主となるや、小刀にて傷をつけ其液を隼しめ煮て阿片を製す。一匁尚 4、50 錢故に米作に比して益多し故に四川の好因は変して阿片園と化せり。秋植へて春収穫す。其跡へ又米を作る然れどもこれ暖地のみにして少しく山科は二作することを得ず。甘肅の如き寒地にては 8 月頃漸く花咲き実のるの状なり。然れば吃烟者の多きこと烟館、即ち阿片を喫する店の多きこと。四川省の如き数戸の田舎町小港尚烟館あり。少しく人の輻湊する地に至れば街をなして烟館羅列し、各館又数 10 人床植えに列臥して喫烟す。亡国の兆し一事にても察しらる。一盆は又 12 文、16 文、20 文、24 文なり。金満家如きは一日に 7、800 文乃至。一雨銀の価ある。阿片を焼きすてゐる。予が嘉陵江を下るとき一の寺院の門前に至れば数名の乞食、阿片を喫してあるを見たり。如氏、一度せ之を喫せば之を止むること難く乞食となり食はなさざるも尚烟を求む。実に喫烟者の顔の青ざめ血色のなき一見其吃烟者なるを見分くべし。

○水田と云い、阿片園と云い、田畑悉く水牛を用い耕す。其器具中、鋤は日本と大同小異なり。只日本の物に比して大なり。又馬鍬の如き人其上に乗りて曳かしむ。大さも日本のに比せば 4 倍もあるべし。米国は大農、日本は小農法なりとせば。支那は中農法なりと云うべし。其田地の大なる 2 反、3 反以上、

一町もある水田もあり。畠の如きは数町、数 10 町の大なるものあり。

○20 人地質に至りては先ず火山土の如くして、赤色を帯び肥料を与えざるも常能く出来。地層甚だ深し。土粘着あり。又農具中鋤、唐箕、鋤等より臼、綿車等、日本と同様なり。彼等の水車には甚だ見るべきものあり。河の水流を応用し直径 3、40 尺大の水車を造り。水田に引く。或は人足にて踏み巻き上る車あり。又兩人にて「塵取り」の如きものに両方に紐をつけて遥か低地の水を汲み上るあり。又堤防にて水を溜め置くあり。四川省の物産、石炭、銅、鉄、塩等の鉱物あり。農産物は米、麦、豆、阿片、烟草、砂糖、茶、生糸、麻、蠟等、其他野菜は所有もの出産し、果物又多く。桜の実、蜜柑、枇杷、核桃、桃等、又所有もの産し。牧畜には猪豚、支那一般の多く養う所にして四川又同様、各戸数頭を養い猪豚の多きこと人口よりも多からん。家鶏又羊子、鴨子、山羊等あり。黄牛は牛乳を得ると田舎にて干田を耕すすにとに少しく用ゆ。其数多からず。野にはかさざき、烏雀は勿論鳩其他の小鳥又多し。

○茶は西北地方山地に多く。雅州天全等は西藏に向て輸出する所の粗製の茶一年数 10 万両を産す。

○水溝、成都を中心として四方水利甚だ便なり。眠江は数口に分かれ其小河は又数小溝に分けて田畠に灌ぐ故に夏好天続く時は四川省は農年なり。然れども本年 5 月の頃、この地をすぐに各県の知事は皆雨を祈り数日間齋戒を行へり。少しく高き地は水の不足を告げ、苗の植え付けに困難せるを見る。然れども大体より見れば水地にして夏旱を以て四川の農年となす。材木は甚だ少なく大山深林なし。只小丘或は山陵、田辺に柏樹等を植えて、用材となし、河岸など断岸、断壁す。槓の木等を作りて薪材に供するのみ。而して。石炭は四川、至る所に産して薪材の主なるは石炭にあり。材木は家屋、棺、舟に多く用ゆるも大木は至て少し。

○支那の百姓は其地方、地方に鎮とか場とか、店とか称する紙上りて、月に 7、8 回近方の農民、或は卵、鶏、米、麦、野菜、果物、黄糸、烟等各自の出産物を牛にさして背に背い持ち寄り茶館に群集して談合中交換して各々自用を達す。これ又日本に見ざるの風なり。

○田を鋤きて後、均すときに多くは楷子を以て田に浮かべ 2、3 人して之を曳き以て地をならす。日本の「エブリ」など称する具を見ず。是又一奇なり。又水田植える苗も其間、甚だ遠く 1 尺 5 寸の至 2 尺もあり。其苗数も 2、3 本にて少なきも、其株非常に増えて高さも 4、5 尺となる。稲穂もよくみのる。冬中より植付までは水田中に鴨（アヒル）を飼ひ群れをなして水田を巡遊す。是又、一挙兩得の經濟業にして支那の百姓中々考えたると見え、苗代は日本と同様なり。只ままに植え替えをせずして、其苗代の間を間引きておりしものもあるが如く見受けたり。田植は男子にして女は例の小脚にして不具同様なれば水田に入るなどのこと叶わず。男子の業なり。畠には女子も出ることあり。田は冬中、水を灌ぎ置き、一回鋤き返し、春又一回鋤き返し後、馬鋤にて平地にす。馬鋤は名の如く、馬を用ゆる多し。畠を耕す。又馬を用ゆる多し。馬、驢馬、黄牛、水牛、何れも農家の用ゆる所なれども、一として日本の如き荒し廻る猛きものなし。皆素直にして能く人命に従う。

○田植へて后 2、3 回、田の草をとる。支那にては、手にして杖をつき、只足にて稲の間をかき回すまでにて手にとるにあらず。以て株の間の広きを察すべし。人口の多き耕作の行く届ける如何なる山植えと雖も田畑あらざるはなく、人家あらざるはなし。又大河は夏水多きも冬に減水せば其あとに小屋を掛けて農業す。キビ高粱にて焼酒を製し支那人常に酒と云は是也。又トウモロコシ多く作る所あり。稲は多くほさずしてこなす。

○西藏の農業

西藏の国は、甚だ寒冷にして米を生せず。又通常の麦も生せず。今、打箭炉より巴塘に至る道中につき見聞せる所を記さんに、麦は青稞と称する 1 年 1 回収穫するものなり。秋、種をまき雪の下にある殆ど半年、4、5 月の頃より漸く芽を張り、7、8 月の頃、穂出て、9 月より 10 月頃に至り、漸く収穫す。7、8 月の頃、出穂盛りの節に於いて尚雹の為に害を蒙むること多く為に収穫甚だ少し。只大江の辺等や低

地なる所は其害少しと云う。

○粉巴とは、西藏人の常食物なるか。即ち青稞を煎りて挽きたる粉なり。甚だ粉パン、之を酥油茶を以て練りて食す。奇なるは箸を用いず、五本指にてつかみ食す。麵とは麦粉なり。形大麦に似て其質小麦なり。これ少しく暖き低地に作り、巴塘の如き其名産地なり。これにてコーコイ、即ち焼餅、或は麵、即ち温飩を作りて食す。野菜は出来ざる地方多く、低地には菜、大根、蕪蘿、其他、所有もの生すれども土人は多く作らず。多く食せず、殆ど菜を食せざる人種と称すべし。酥油（マーチャ）、彼等の二大常食の一にして粉巴と酥油は1日も欠くべからず。牛乳を煮て製したるバター、即ち牛酪なり。これに粗菜を熬出して濃厚にし、塩を混して飲む。茶と味噌汁との混用にて8碗10碗は平常のことにて一人能く一罐余を傾く。其又酥油茶を製する。茶筒の奇態なること。長さ3、4尺。丸さ1、2尺に木輪をはなたる。木筒に右の3種を入れ酒屋に用いる、まぜ棒の如きものにて数10回となり。突き引きて雑ず。耕作の方法は、2頭の毛牛にて鋤を曳かしめ耕す。或は叉馬を用ゆ。肥料は牛馬糞を与う。毛牛は其形常の牛大にして、或は少しく大なるあり。其毛甚だ長く1尺以上に及ぶあり。白あり、黒あり、反り。角長くして屈曲し、「い」の字形ちにあらず。常に山に放ちて、草を食し穀物を与へず時として豌豆を与えることあり。寒に堪へ寒中能く雪中を行く霜夜野外に寝て平然たり。角は益に立たず。野に晒せば枯木の如し。皮は荷物を含み西藏内地の草地を通過するに用ゆ。又西藏人の常食の一にして裏塘の如きラマ3,500土人等1,000人斗りに対して冬期は日々四、50頭の毛牛を食す。牧畜には羊を牧し、羊毛羊皮は西藏物産の主たるものなり。馬は非常に多くして徒歩するもの甚だ稀にして、出れば必ず騎馬す。其馬形ち内地馬と大同小異なれども更に穀物を与えず。只草のみにて放牧するゆえに其毛又粗き牛能く寒に堪ゆること牛と同様なり。西藏にて恐ろしきは蛮犬なり。形大、眼色茶、毛は綿花を被る如く。寒に堪へ常に鉄鎖、或は毛縄にてつなぎあり。知らざる人來れば鎖を力一杯に張りて飛びかかる。又やや人に馴れたるものは放ちあるも、人に來りて吼へかかる。故に他人の内に至ること殆ど出来ず官の保護なき彼等放牧の民は自治以て盜賊を防ぐなり。又彼等遂に組みて茶を運びなとする時は野外テントを張り宿す時の番人に用ゆ。家屋は屋根平たき土間なれば其所にて麦をほし、又こなす。麦からは牛馬の冬中の食物なり。干草をなすも多からず。西藏には一家に牛馬は数10頭を飼う。故到底穀物を与ふるを得ず。

○陝西省の農業

四川よりして陝西の地に至れば全く相異なるは地形なり。四川の水地にひきかへて陝西の地なり。丘陵多く干地多し。たまたまに水流の地あるも之を田畑にひきて耕作に用いる。甚だ難くして陝西一帯殆ど水田なしと云うも可なり。たまたまに水田あるも3牧、5牧の山間の為にあるのみにして見わたず広き水田なし。これに反して畝畑の多きこと限りなし。因に云う。畝、畑の字、支那になし。干田と云う。陝西の地に二大平地あり。一は漢中平地。一は西安の平地なり。漢中の平地や中央漢水流巾五、60清里（日本5、6里）。長さは2、300清里（2、30里）、漢中に入るや麦粉にて製せる焼餅を常食とし之をコーコイ又はモーモイと称す。1斤、2斤、3、4斤のものあり。又麵を多く食し、米飯少し之れこの地方より水田少くして只見直す。一帯悉く麦作の平田なり。更に鳳翔府より西安に至る400里の平原は更に下方に擴がる数100里。南終南山より北は乾州岐山の一帶に至る100里の間は中央に渭水流平々旦々たる天平地なり。四川に於ける成都の四方に比すべし。尔れども渭水は河床低くして兩岸頭を灌く能はず。河巾四、5清里より10清里に至るの廣さあるも其間の砂岸にして耕作に適せず。又水急にして舟の便なし。

以上の如き干地なれば雨水多きときを以て辰年とす。水は干田中、所々に井を掘り、或は人力にて汲み挙ぐるあり。或は馬力にて汲み上るあり。其器機は鉄及木にて造る。水車は甚だ少し。田は少しく斜に傾きありて水を全面に注ぐあり。又田中に水道を造りて全面に灌くものもあり。陝西、平田の一特有なるは其積の廣大なるにあり。其長さに至りて日本の半里以上もあるありて半日に5、6辺往復する如き

又少しとせず何れも 4、5 丁以上のもの多し。其広大なることは他に於いて見能はざる所なり。又石は稀に見る所にして其地は深層を以て成る泥土なり。故に幾 100 尺の底と維ども上層と同様なる土なり。之れに雨の降るや地下に水を吹ひ込むこと少なく、只上層を流れる故に泥水は忽ちに田面を変して泥湖となし浮々として渭水に入る故に人車往來の道路の如きは雨天には到底通ずるを得ず。又其道路は田面より低きこと数 10 尺なれば往來のもの兩岸の田辺を往來するもの甚だ多し。陝西には更に水牛を用いず。悉く黄牛なり。是地寒冷なると水田を有せざるとによるべし。馬を耕作に用いる。又多し。陝西には材木少なく従つて家を造るにも泥土にて壁を造り上げ屋根も多く、泥土なり。又穴居の内多くして少しく山辺に至れば人家の大半以上穴居なり。中部平地には堡^{とりで}と称する土城ありて、其中に数家或は数百家群居し、夜分に至れば城門を閉ち盜賊又は有事の時、匪徒を防ぐ。一村数ヶ所の堡あるあり。其造り方は土煉瓦を以て畳上り煉瓦は別に焼かず焼かるとするも薪材之れなし。只鼎州城は焼きたる煉瓦なり。石を用いず石は近方に無之故なり。土城は概子高さ 3 丈斗りにて一門なるあり兩門なるあり。四門なるは少し、大なるは一城の如きあり。米は稀れに底地方に見ることあるも陝西の以上二大平野は是麦を作るの耕地なり。陝西人の常食は麵とパンなり。共に麦を以て造る。其他豆類、菜はあり。麦の如きも予の通行本年の如きは雨少なくして不作なり。知県知府などのしきりとも。耕作を勧むるの提示ありたり。不毛の地となる所甚だ多し。この不作は今や 4、5 年続き来たりて元 1 斤 30 文斗りの麦麵は今や 70 文と成れり。陝西の四川と大に異なるは馬車を用いることなり。之を運輸交通に挙するは勿論、農事にも多く用い或は草を運び麦を運び或は水車の機械を運ぶ等に用ゆ。又陝西に於いては牛馬を飼う草少ければ之を耕作す。多くはゲンゲの花の如し。尔れども大にして 2、3 尺の高さなるものなり。是れ又降雨少き時は不作なる如し。而して、山地に於ては終南山一帯は東西数 100 里樹木あり。従つて水あり。又水田少からずと雖も北西方は丘陵にして平原より益々水に乏しく而も山顛に至るまで耕地なり。この山や山基より山頂に至る全く泥土を盛り上げたる全部の土なれば年々夕立、大雨に洗はれて土を流し洪水などの時は少しき低地には数尺の泥を積み作物は全く土中に埋る如きことあり。又水の通る所は平生少しも水なしと雖も強雨あれば常の洪水となり土を流し行き数 10 尺或は数 100 尺の土壁となりて崩れ行く。この陝西の地を全く洗い流し了らさる間は到底渭水の水の清まざれば止まず。

○甘肅省の農業

甘肅は地広くして凡そ三大区域に分かつべし。1 は平涼地方。2 は平番地方。3 は狭道地方なり。

1. 平涼を中心として東西南北の各地は大概陝西に相類する所ありて地形、地質、物産、大同小異なり。
2. 平番地方は大に砂漠に類似し草木少なく只、水利のある地方少しく耕作適するも其他は大に不毛の地なり。
3. 狭道を中心とし蘭州の西寧、眠州辺、即ち黄河及支流の水の灌の時方は氣候の零冷なれども麦作非常によくして甘肅に於ける首脳部と称すべし。

甘肅には馬及黒牛を多く用ゆ。又徒歩する者少なく騎馬多し。牧畜盛んにして羊甚多。甘肅は回々教徒多く 50 万と称す。更に内地を加へ計せば 100 万をも越ゆべし。彼等は牛肉を食して、決して猪、即ち豕肉を食せず。河州の如き、大州中一の猪を見ず。又彼等の勢力の大なるを見るべし。時々一揆を起こし、或は西安にまで攻め入ることも 10 年斗り以前にありと云う。人種も一種異なり風俗も同じからざる所あり。主産物は麦、阿片、烟草、水烟台に用ゆるもの西安に出す多し。羊毛、皮貨、甘肅には又果物非常に能く出来。梅杏、桃、梨、林檎等あり。野菜には大根、奥菜、茄子等あり。是れは、黄河水利のある地を以て主とす。其他寒冷なる為、麦の如きも収穫には尚 1 年間の日月を要す。又他地と異なるは烏麦多し。之を洋麦と云う。粉にして食し。又煮て食す。其他平豌豆、甘肅胡麻の如き栗の如き餅（菽米と云う）如き他地に多く見ず。甘肅にて会寧県地方及平番地方其地苦水と称する。ニガリ水にて呑むべからず。僅かに天水をとり或は黄河などより遥かに運び来りて飲む水は非常に高価なり。又其れ

よりして塩を製す。所によりて一定せざれども、平番地方少しく黒色を帯び粗大なるものなり。価甚だ安し。

○新疆省

甘肅の内なれども蘭州の西北方は新疆と大同小異なり。甘州、肅州、涼州は米を生し、天子に貢すと云へば、其質善なる知るべし。伊犁の如き口外に分るも尚野菜あり。麦生し價又便宜なりと云う。一斤麦麵 12、3 文なりとぞ。伊犁地方水利よく産物多く人口少し。一度この地に入らば本土に帰るの念なりなると云う。実に生活に適せるよき地なる故なり。

○青海

青海は農甚だ少し皆牧畜、人種にて水草を追うて転居する人種なり。やや平地水利ある地方には青稞又は洋麦を作す。大概西藏と同様なり。西藏に比して茶輸入少し是甘肅地方茶産出せざるべし。

○支那外教

- ① 天主教、償主政略、侵略政略
- ② 耶蘇教

○支那旅行中銅錢仕用法

○甘肅論目次

- 1. 地理 方位、地名、戸数、人口、河、水、山、地図、地形、里数、地質、交通、城郭、道路、車馬、通信、廣口。
- 2. 歴史 古蹟、古賢、石碑。
- 3. 政治 官名、役所、營所、税金、管割、告示。
- 4. 宗教 仏教、道教、喇嘛教、回々教、耶蘇教、寺院、僧侶。
- 5. 風俗 男女、頭髮、衣服、携帯品、家屋、食物。
- 6. 人情 性質、教育、外人、人種。
- 7. 言語 談話、文字。
- 8. 商業 輸出入、貿易、運搬、物価。
- 9. 農業 水田、水利、耕作、農具、牛馬。
- 10. 物産 穀物、野菜、果物、鉱物、藥材、動物、魚鳥、皮貨類、製造品、輸出入。

○雲南省城雲安府	清里 8 里	日本 1 里	1 1 里 9 丁
崇明州			1 5 里
馬戩州			6 里 2 3 丁
曲靖府			3 里 2 7 丁
霑益州			3 里 2 7 丁
白水駅			7 里 1 8 丁
平彝県			5 里 2 3 丁
平賀禮駅			8 里 1 4 丁
普安州			3 里 5 丁
軟橋駅			3 里 3 2 丁
新興駅			3 里 3 2 丁
江両駅			3 里 5 丁
安南県			8 里 3 2 丁

永寧州		1 1 里 9 丁
鎮寧州		7 里 1 8 丁
安順府		1 0 里 1 4 丁
平安県		8 里 1 8 丁
清鎮県		7 里
○貴陽府	(凡そ 1 2 9 里半)	8 里
龍里県		1 8 里 5 丁
平越州	武昌道の新□に達す	

総督	制基	制軍
巡撫	撫台	中函
布政	藩台	方伯
按察	臬台	廉訪
巡道	道台	觀察
関道	道台	觀察
守道	道台	觀察
知府	府尊	太□
同知	二府	司馬
通判	三府	戒府
知州	州□	刺史
知県	県寧	全丰、州府
府圣	経廳	
州銅	州佐	
県函	分県	式尹
曲史	右堂	部廳
巡検	分司	巡政、司廉
提督	提台	軍門
總兵	鎮台	總鎮
副将	脇台	協鎮 (炉)
参□	参府	
遊撃	遊府	
都司	都圍府	(炉、巴塘)
守備	守府	(裏塘)
千總	摠戒	
把摠	寺城	寺汎 (裏塘)
外委	分汎□	
将軍	軍憲	
学政	学台。学院	
糧台		
土司		
大臣		

雲南 滇地 滇 麗江
貴州 貴陽 黔 苗疆
23丁沿革 ○和蘭古干闐 元忽炭
罽賓 カシュミル
龜茲 庫車
大月氏安息（波斯） （○月支哈密）
伊吾廬 今哈密

○西藏研究俱樂部

宜しく文部省は留学生を出して研究せしむべし。

1. 留学生は日本僧侶を出すべし。
2. 其選定は予に一任すべし。
3. 留学生は、蒙古に2名、青海1名、西藏3名、四川1名、北京1名、印度1名、ニポール1名。
計10名。

経費 1人に付 1年 120円、1,200円

縦続 5ケ年 6,000円

外 経費 1人に付 往復 400円 計4,000円

書籍買入 経文 2,000円 書籍 11,000円

器具諸雑費 2,000円

計 15,000円也

1. 西藏人を雇入れること。
2. ラマ寺を建てること。
3. 西藏経文翻訳のこと。
4. 蔵研究のことを報告し、訳書出版のこと。

○北京政府交渉策

○北京理藩院をして差使として日本僧を入蔵せしむることを計ること。

初年 4,200円

2年 2,200円

3年 2,200円

4年 2,200円

5年 4,200円

計 15,000円

○植民地としての青海地方

一回、移住人の状態

迪衛山人

合計

○清国加特利教徒 米国加特利協会報告

直隸 112,790

河南 10,100

滿州	2 1,8 3 0
蒙古	2 7,2 4 0
山西	2 1,4 5 1
山東	3 1,4 1 0
湖南	5,8 8 5
湖北	3 0,6 1 0
西藏	1,3 2 0
江蘭	1 0 4,0 7 0
雲南	1 0,2 9 0
廈門	3,3 7 0
福建	3 4,2 5 0
香港	7,0 0 0
廣西	1,1 1 0
廣東	3 4,9 9 0
甘肅	5,0 1 0
四川	8 0,6 0 0
陝西	2 9,5 8 0
江西	1 9,6 5 0
其外	1 6,0 0 0

總計	4,1 9 4,8 8 8	方哩 3 9 9,9 3 3,0 2 9
河南	6 5,1 0 4	2 2,1 1 5,8 2 7
浙江	3 9,1 5 0	1 1,5 8 8,6 9 2
江西	7 2,1 7 6	2 4,5 2 4,1 8 8
貴州	6 4,5 5 4	7,6 6 9,1 8 1
雲南	1 0 7,9 6 9	1 1,7 2 1,5 7 6
福建	3 8,4 1 0	2 3,0 0 0,0 0 0
直隸	5 8,4 8 0	1 7,9 3 7,0 0 0
山東	5 6,1 0 4	3 6,2 4 8,0 0 0
山西	5 6,2 6 8	1 2,2 1 1,4 5 3
陝西	6 7,4 0 0	8,4 3 2,1 9 3
甘肅	1 2 5,4 5 0	9,2 8 5,3 7 7
四川	1 6 6,8 0 0	6 7,7 1 2,8 9 7
安徽	4 8,4 6 1	2 0,5 9 6,2 8 8
江蘇	4 4,5 0 0	2 0,9 0 5,1 7 1
廣東	7 9,4 5 6	2 9,7 0 6,2 4 0
廣西	7 8,2 5 0	5,1 5 1,3 2 7
成京	4 3,0 0 0	6,0 0 0,0 0 0
滿州	3 6 2,3 1 0	7,5 0 0,0 0 0
蒙古	1,2 8 8,0 0 0	2,0 0 0,0 0 0
西藏	6 5 1,5 0 0	6,0 0 0,0 0 0
新疆	5 7 9,7 5 0	1,1 8 0,0 0 0

10月19日改正

○執綱（総務）	大谷勝縁
○本務総長（参、准、参務）	石川舜台
○教学部（布教局、勸学局）	谷 了然
○統制部（会計検査局、監査正局）	平野履信
○庶務部（特別教務局庶務課）	和田円什
○会計部（会計局）	石川（兼任）
○法務局	小林什尊
○内事局	佐々木祐寛

○12月10日後蔵喇嘛と対談

50 余と 20 才余の 2 のラマ後蔵デシnge（上書）寺のもの扎什倫布を去る 5 日の地なり。前蔵より后蔵に至る騎馬 5 日里程。西藏より青海を経西寧に至る 40 日。「コーパー」とは「トンド」なり。トンボ（レ）、

トンバ。北^{ちやしりんぶ}什倫布、コンブ、苗、彼の通過せん道は、

ラサゲンバ 1,000、10,000 のラマ

リグゲン 1,000 ラマ

セルゲン 800

テイゾンゲン 3,000

タルスー 7,000

ガルゲンバ 2,000 これより西寧に至る 13 日

セ° デンポ 24 日里程

青海周囲 12 日

前蔵大宝法主 30 歳 ギャツパンシャレンポチェー

后蔵大宝法 コンタレンポチェー 47 歳

旧暦9月11日

四川候補道台 安成氏

駐蔵辨現大臣に任す

文海氏駐蔵大臣 32 年 12 月王卡死す

陳慶氏は 33 年入蔵途上にて死す

○9月11日電傳

上諭四川候補道安成着賞給副都統銜作為駐蔵幫辦大臣循例駐駅往欽此 同日奉

○12月12日 井氏曰く佛領事の言に目今西藏内地戦乱あり。是れ蔵人の露国に朝貢贈物等をなせしより起こるものなりと云へり。何れ明後日佛領事に逢へば悉しく尋ねる所あるべし。又巴塘の仏教師英語を解すこの人蔵語をよく学んでは如何と。後聞く。裏塘巴塘土人の反するものなりと。

前藏——2,000 余里——大吉嶺

セ° ンテープー メンチュン
 ཇུ་མ་རྒྱལ་པོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་
 チャプコンレンポチエー
 ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་
 ポルキペポー
 ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་
 ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་

大吉嶺——3 日——塔西蘇登——3 日——布魯克巴——嶺——巾白克里——4 日——江孜

རྒྱལ་པོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	ドチリン
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	カレンボン
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	ポートン
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	パタンチェン
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	ナタン
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	ニヤートン 有藏官
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	チェマー
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	ガニンカー
ཉེ་མོ་ལྷོ་མ་རྒྱལ་པོ་	ペーリー 有口

国史四の 55 丁

○観応 3 年（南朝正平 5 年）6 月、直冬起兵於筑紫石見人三角等応之師泰の師起石見数城（正平 4 年 8 月、足利氏以其子直冬為西国探題）

○2 月師泰至自石見与尊氏合与南朝戦う

- | | |
|-----------|-----------|
| ○支那疆域沿革略説 | 1 冊 |
| ○蜀攷水 江河 | 4 卷 2 冊 |
| ○蜀故 沿革等 | 2 7 卷 8 冊 |
| ○天下路程 | 2 冊 |

『蜀故』7の31丁

蜀の禅教は皆破山禅師を祖とす。師は梁山の人。天童悟法嗣第2人也。其弟子丈雪禅師は内江の人。成都昭覺寺に演化し門徒甚盛なり。康熙丙子5月、蜀に至り、之を訪ふ。則ち示寂め半載なり。年10余今住持弟子佛寛禅師は即ち其姪なり。

○勾居士名は令糸宗とも、丙雲、有学人問答随材応響○著火蓮集。無相宝山論。法印傳、況道襍言。百余篇○有敬孔瓦屋和尚塔偈曰。○大空無尽劫成塵玄歩孤高物外人。日本国来尋彼□洞山林下過迷津充流法乳誰分曉ラマ教知我最親○163才○後方於この塔□全身○瓦屋和尚名能光日本国人なり。○嗣洞山悟本禅師天復年初入蜀○偽永泰軍節度使○鹿虔扈捨碧鷄坊□為禅居之○至孟蜀○長与年未遷化□齒160有三故有是句

沙門僧爾□詩慕李白鄙賈□蹇涉乃自諷其詞云鯨目光焼半海紅□頭浪蹙攢天白而去我不能措思於籬襍蹄□之間仍粘放周易佛教為歌行所掩。

雲南城門外古代日本僧の来たりて建てたる一寺院今尚存すという。

四川 岷江、沱江（瀘河）、黒水（金沙）、白水（嘉陵）

普陀山、五台山、峨眉山、天台山、終南山

地名	1両に付銭換	大銭	和銭	比例
打箭炉	1050	95	5	100

	1両価	1吊に付減ずること	毛銭百文中	比例
重慶	1吊220	10	0	大銭
成都	1吊230	12	10	19銭
打箭炉	1吊50	4	0	大銭
羅江	1吊120	10	0	大銭
廣元	1吊20	12	0	大銭
漢中	1吊200	6	0	大銭
宝雉	2吊200（但100は80文）	200	（656、毛24	37
興平	1吊700	0	（655、毛45	46
西安	1吊500	20	30	37
咸陽	2吊	20	50	対半 ^{といばん}
醴泉	2吊	20	50	対半
邠州	1吊500	20	30	37
涇州	1吊600	20	50	対半
平涼	1吊280	20	0	大銭
会寧	1吊150	20	0	大銭
安定	1吊155	20	0	大銭

蘭州	1 吊 1 5 0	1 2	3 0	3 7
平番	1 吊 1 1 0	1 2	0	大錢
碾伯	1 吊 5 0	1 2	0	大錢
西寧	1 吊 3 5 0	1 2	6 0	対半
丹口口	1 吊 3 0 0	1 2	0	対半
巴燕戒格	1 吊 2 5 0	1 2	0	好錢
河州	1 吊 2 5 0	1 2	0	好錢
狭道	1 吊 1 2 0	2 0	0	好錢
泯州	1 吊 1 2 0	2 0	0	好錢
楷州	1 吊 1 1 0	2 0	0	好錢
碧峪	1 吊 1 4 0	2 0	0	好錢
保寧	1 吊 1 2 0	1 2	0	好錢
合州	1 吊 2 0 0	1 0	0	好錢

稗史と宗教 大同小異 直仮一致

打箭炉	米 1 升 3 斤	1 4 0	1 斤	4 6
邠州陝西	米 1 升	2 1 0		
	豌豆 1 升	1 9 0		
平涼府甘肅	米 1 升	1 8 0		
	豌豆 1 升	1 4 0		
蘭州	米 1 升	2 5 0		6 2
西寧	米 1 升	4 5 0	1 斤	5 0
重慶	米 1 升	1 0 5		3 5

○清代疆域沿革

蒙古四大部

1. 漠南、内蒙古、共 25 部、東吉林に振り、西は賀蘭山に至り、南は長城に界し、北は瀚海、表数 1,000 里
2. 漠北、外蒙古。又喀太祖の裔之に汗たり。土謝図汗と号す。其族、車臣汗、札薩克図汗と並て三部と為す。東黒龍江に界し、西は厄魯物に界し、北露西亜、南は瀚海に尽く。東西 5,000 里。南北 3,000 里。皆元裔なり。
3. 漠西、厄魯特、又衛拉に作る。4 分り。
 - ① 準噶尔は伊犁に居る。
 - ② 杜尔伯特は額尔齐斯に居る。
 - ③ 土尔扈特は塔尔巴哈台に居る。北去後輝特之に代る。皆瓦刺也先之裔なり。
 - ④ 和碩特は烏魯木齐に居る。独り元太祖第合撒兒の後なり。
4. 青海蒙古、是れ和碩特固汗は明末従りて青海に居る。喀木、衛、蔵を併せ、其子姪分て套西に居る。是賀蘭山（又は阿拉善）厄魯特と云う。

聖祖康熙 22 年、喀尔喀乱る。準噶尔、噶尔丹、隙に乗じて之を襲う。喀尔喀走て清に投ず。噶尔丹其地を併す。（是れより先き青海車臣汗を殺し兼ねて厄魯特を有元、南は回部を略し威全は西藏に至る。

是に至り、又漠北を併す。) 東犯して内蒙古に入る。帝転征して、大に之を破る。噶尔丹自殺し、阿尔泰山以東皆復し(喀分喀西北を拓き烏梁海科布多に至る) 喀尔喀を故地に帰す。而して策妄拉布坦(噶尔丹姪) 準部に授る。

西藏は本に吐蕃、元明烏斯蔵と為す。其人之を唐克特と謂う。又土伯特なり。4 部あり。

東(青海、喀木、又作察木多に又康と云う。前蔵有り四川省外)

西(衛、即布達拉、中蔵あり。本吐蕃建牙の所。蔵)

(固始行は蔵衛を以て達頼班□二刺麻に□じ法己を以て蔵王を兼ね) 噶尔丹は青海を破り汗絶え其亡に及び之を復す。(固始汗孫達什巴図を以て和碩碩親王と為す)。策妄西藏を就改す。清兵撃を之を定む。西藏東西 6,000 里南北 5,000 里。

世宗雍正元年青海(達什巴図子羅と蔵) 殺す。之を討つ。羅と蔵準部に奔る。青海を分て 29 旗とす。(大臣を西寧に置き之を鎮む) 準部(策妄子策零) を破り、科布多に城き(尋て之を察罕瘦尔に移し、額什噶尔に授る其弟霍集占い葉尔羌に授る) 之を平らり。同 26 年、伊犁將軍を置き(天山南北路を節制し惠遠城に鎮す)。迪化州(烏魯木齊) 鎮西府(巴里坤) を建つ(伊犁属城九、烏魯木齊属城 16)。

南路大臣を喀什噶尔に置く(東西各四城は東路三城と並び共 11 城。道光 11 年移して葉尔羌に鎮す。○後、南北路を以て新疆省と為す。東西 6,000 余里、南北 3,000 余里) 葱鎮以西、布魯特、哈薩克愛烏 40。浩 40。巴達克山、諸国皆来貢す。蜀国(阿瓦に都す。13 略あり。表 3,000 里) を封ち破績す。再び之を征す。緬甸和を請う暹羅安南亦朝貢す。

廓番喀(西藏西に在り南は印度に隣す) 西藏を掠す。撃て之を破り戍兵を蔵に置く(初雍正五年大臣を蔵に駐む。是に至り権諸王に等し。雍正中貴州苗、乾隆中金川土司四川省湖貴苗等反す。仁宗嘉慶に至り白蓮教匪起り湖川陝を擾す。7 年を経て平く。道光 6 年張格爾(博羅尼都孫循じて、浩 4 丁に在る者)) 回部を陥る明年之を勦す。

甘肅一班

甘肅省は清国本部 18 省中の一省にして、東は陝西省と界し、南は四川省、西は青海、其西北は新疆省及び北は長城を以て蒙古と界す。

全省の面積は 125,450 方哩にして四国、九州、北海道、台湾をのぞきたる日本の本土と比してやや大なり。

人口は 9,285,377 人にして日本に於ける、四国、九州 2 大島の合計人口と大同小異なり。即ち日本人口の 5 分の 1 に当たる。

回々教

気候

牧畜

苦水

鍋鬼	1 斤 1 6 両	6 4	棗欒木	6 月 1 8 日
同	1 斤	5 2	留鳳関	2 0 日
同	1 斤	6 4	鳳県	2 1 日
同	1 斤	6 8	黄牛舖	2 2 日
同	1 斤	6 4	西安	6 月 3 0 日
同	1 斤	7 2	咸陽	7 月 3 日
		7 6	礼泉	4 日
		6 0	永寿	6 日

7 5		8 日
7 2		9 日
4 0		1 1 日
7 0		1 3 日
8 5		1 8 日
8 0		1 9 日
7 2		2 2 日
4 4	蘭州	2 8 日
4 2		3 1 日
4 0	平番	8 月 2 日
3 2		7 日
2 8	西寧	9 日

「思想の変遷」 『在渝日記』(明治 33 年 12 月 22 日)

1. 学問は、何の為に学ぶべきものや。
皆、人の学ぶ故に、己れ又学ばざるべからずと考えし時代。
2. 普通学の必要。
今や、世間一般の学をなす。我が仏教の布教に任あるもの普通学。即ち、小・中・大の学を学ばずは、専門の仏学も応用する不能べしと考えし時代。
3. 欧米布教策。
今や欧米、仏教を求めて止まず。これには、第一支那訳の經文を翻訳せずしあるべからずと考えし時代。
4. 英文研究時代。
同志を集めて「英作文会(イングリッシュ・コンポジショナル・ソサイチー)」を結び「文学(レクチュアー)」と称する、毎週、『英作文集雑誌』を校内発行し、又朋友間、手紙に英文を用い、尚東京に移りても、『智慧と慈悲(ウイズ・アンド・マーシー)』と称する「英文集」を毎月、造りて英文に志し、又少々經文を訳せるの時代。
5. 翻訳には、梵学の必要を感じたること。
少しにても、英文に仏教經文を訳せんときは必ず梵音出て来たり。梵語を解せずは、第一、其綴すら困る。是非、この学は少しく学ばずは、目的達し難しと考えし時代。
6. 梵文經典の不足を感ぜし時代。
少しにても梵語を学び、梵文經を見れば、益々、其原文の多からんを望む。今伝う梵經は、僕が 10 部ばかりに過ぎぬ。益々進んで求むるを要す。特に三部の一なる觀經なし。量等の原本探るの必要あり。
7. 自動的東洋学研究必要。
西洋に東洋学ありて、東洋人よりも却って精し。特に仏徒よりも欧米学者、梵学に熱心研究せり。自動的東洋学研究必要なり。特に、仏徒には梵学の自動的研究を要す。然るに、甚数甚少し。又欧米梵学の大儒梵本を以て、漢訳經を批評す。自ら進んで彼を厭倒するに非ずんば、欧米に仏教の伝道困難なりと考え。世に伝う原書はニポールより多く出て、印度には、已に多く絶へたり。然らば、西藏に入らば、古来数千年来、伝来せる、梵本經なしとせず。宜しく行て探索すべしと。
8. 西藏行の感念。

東洋の秘密文庫。世間未知の図書館と望みを属せらるる西藏国前後蔵より薩迦の經蔵には我々の求めて止まざる東洋学の古木なを秘蔵し居るも不計。今迄は友人に西藏行を望み居りしも、今や東洋問題、特に中央亜細亜問題、年々通過し来る。我は不要多錢単奇旅行せんと。自ら企てたり。屑々と延引せば、却って外国の為に先をとられんと恐れたり。

9. 西藏学の必要。

西藏漠遊の途に上りて段々と土人等に遮られて。暫時、巴塘及び打箭炉に滞在。少々西藏經文を得て研究せし処、案外にも、其訳文の我々平生望み居る梵語原文に近きより、今は、英文よりも梵学よりも即ち、西藏文研究の愈々必要なるを感ずるに至れり。

○京城の貧富

○外教の状況

○言語調査

○宗教法案

○清教徒

○西藏經文の價直、蜀故 日本僧

○馬克斯博士逝去。西藏露国関係。駐蔵大臣。

○南條○ 本山○ 井円○ 寺本 水野 成田○ 堺○ 中村○
武田 中島 菅 国元

○元の太祖

鐵木真(テムチン)は蒙古人なり。タイチウ。タタル。ケレナマン。諸武を遂に帝位に即く成吉思汗と称す。蒙古は韃靼の一部なり。

始祖 ウテカノ汗・印度コソーサンパラ国に在り。

孫 ルーパテ・又はニャトサンムポと云う。西藏に至り汗と成る。

八傳 チコペン・国大に乱れる。

三子 フネテチノー・ヒタに奔る蓋し蒙古の地なり。其曾。

子 ピタス汗。

十一世 トホメル干。

子 ホタサル・ヲノン河東ヲコルツークを降し之に居る。

五世 ハイツ・ハラハペ河に移り隣部歸する者多し。

曾孫 ホポル・始めてハカンと称す。遺言して叔父子を立つ。

叔父子 エンパカイ・是れタイチウ氏とす。タタル部に執られ金人に殺さる。

ホポル子 ポトラ ハカンと成る。

ハイツ子 エソガイ。

1.太祖子

鐵木真 高麗、サマルカンド、鐵門関、アムー河北、金、夏、葱嶺東西、裏海、
ヲロス、即ち成吉思汗なり。ホリム(和林)に都す。チベットを降す。

2.太宗 寧濶台

3.定宗

4.憲宗の弟コツピレッツ

5.世祖 忽必烈 大理を平げ、クラハタイは安南を討つ(ヒンドスタン、カシュミル、ペルシヤ、アフガニスタン)を征す。開平を上部、燕京を中部(后改大都)と為し国号を元と称す。シャムロ、ビルマを討つ。

1.行中省 11

2.阿母河行省 葱嶺以西を治む。

3.アリマリ 元帥府(今伊犁)天山以北

4.ペシハリツク元帥府(烏魯木齊)天山以南

5.キョセン 元帥府(今安西宗)土魯番以東を治す。

順帝 諸方盜起り各地に割拠す。

朱元章豪州に起り元を亡す。帝和林に奔る葱嶺以西各自に国を為す。

印度莫臥児国帝王禿(モゴルは蒙古なり)。

帖木児(タメルラン) 鐵木真第二子ツアガタイの第九世チュイレチメルあり。明初に至り国乱る。

(1,398 生) 族子タメルラン起り波斯、印度を併せサマルカンドに都し威口隣に震こと后国又乱れ、ウスベツク鉄木第一子の裔是を取る。

六代裔バーブル、 今の「トハ爾王」は、其裔なりと云う。□分裂してトハ爾浩□、基華諸国とモンゴル帝王となる 成る。今露国に属す。

其后三世に 13 世百余年、○ボラク(ペルシヤ、アブガー、カシュミ、印ホ)の池波斯に滅アリバル大帝あり ざる。

(1,542 生)

蒙古、白撻鞬、烏斯、喀什迷爾(カシュミル)、土尔格斯丹(トルキスタン)、西藏、康里、阿羅思、阿剌伯、泥婆羅、松瓦江(スルガサー)、契丹、嫩江、阿尔泰山、ココナール、青海、緬国、土伯特、刺薩、烏魯木齊(迪化府)、アルマリソク(伊犁)、烏什、喀什喝甫古勤疏、葉爾羌(やるけんど)、和闐(ホテン)、サマルカンド、カブール、打耳班(デンベンド)鐵門関、ウラル河、裏海、ビザンチン帝国、ダマスクス、メデナ、メッカ、インダス河、シンゾハラ(錫倫)、

中外日報 11月15日上海(12月27日)

西藏○遣使道意○西10月3号即閏月初10日英地球報云俄京聖彼德堡傳称西藏喇嘛僧近派有專使一名前往俄京道達西藏与俄国輯睦意比举恐係李傳相令喇嘛僧為是臺西藏本属中国其内政悉歸華人主持也。

11月30日 中外日報上海

○重慶、訪友來函云、又云、日本僧人輪海君去歲自渝由陝入藏行自青海近因中外構釁途多梗塞現已辺渝与井大尉同處卓園。

我出一ケ

他出一ケ

対手

一ケ 老寿星

二喜紅

三元三星照

四季発財

五馬太守金奎首

六合同□

七巧

八疋馬

六六順

七ケ

八仙慶寿

快計官 全家副
九々長寿 十全大義

○パタラントロー 光緒の満州語

1月12日 正午12時立德 域水



○志君洞 少上 上走 下走 葛
右走 瀧門溪 ○西谷...3戸 ○山王廟2戸
○崇文鎮1戸 左走南川縣小路、右走綦江大路
右 路辻場30里 左 江津縣30里 温湯、
○亮風1戸到南川縣300里 山頂至長主場
三根汛15里、頭底牙、第家坡。
老場10里(亮風嶺方) 祝宴一村会 風景佳也。
文峯場5戸 中梁廟
老場130戸 河5戸、右走土橋場2里
○2、3戸 左走 六角場、雲口大路 右走温塘15里
清水あり、毛溪河口 石橋20間を渡る。
5時、温塘に着す。もはや人の顔を見分くる不能
街上には皆火を点したるの後なり。
豆腐、コーコーにて吃飯吃茶夫れより湯に入る。
一房長さ6間、巾4間のゆつはにて液くべし。
又下は石砂にて夜なれば判然せざるもゆ清み
寄麗なり。少しく硫黄の奥あれども甚しからず。
温度不□不冷にて又適せり。入る□□
6人あれども廣きゆへせがす。
(260文鶏□かる。6文過揚子江舟貸。
20文京相10ケ、25文飯菜、6文ろうそく、
16文宿賃。
△25 站路

○重慶 老廠 六角場

○街市? □明山 ○□坎 ○綦江 ○城子街

15日

○官橋

松崗 ○新場 ○通只縣 ○帮家 ○城議府石報寺開□20多里、清里山苗。

○後巴場五庄辻河 ○木□縣 ○□峯 ○左走 ○貴州省

土□只5里大河、温塘到20里。

走江津縣120里。12時発、魚洞溪 大河辺 □修橋。

○毛溪河 ○漁洞鎮200戸 大岸、1時半 大渡口左岸 数10戸、林家渡破船灘
難船 右岸 3時10分、浮図関、4時、珊瑚霸。

23文 飯、10文 蜜柑、16文 端舟、60文 乗舟下水。

13 日

○20 里、一山を越え松樹あり。長江を望む。風光佳也。
漁洞鎮、揚子江辺漁洞溪の合流する点にあり。人家
200 戸。12 時乗船。溪に石橋を新架しつつあり。
10,000 両と云う。7 墓あり。蜜柑船に乗る。60 里、
60 文にして、3 時間半を要せり。大渡口左岸にあり。
人家 10 戸。凡そ 30 清里の下流なり。

李家渡右岸長江屈曲灘あり。上水の船苦む一双の破船
を見る。浮図関、長江の屈回北行東行或は少南行。

金紫門下珊瑚霸に着す。4 時少前。

忘錢の難、身虫の難、粗食の難、黒宝の難、断道の難。

○重慶 10 里、崇文鎮 10 里、老厰 六角場。

○街市 充明山 ○龍坎 ●綦江県

○城子街 ○官橋 ○觀口橋 貴州 ○松坎 ○三坡

●桐梓県 ○□家 □遵義府

○後霸場 五庄□珂 ○木只鎮県

○非峯 ○左走 □貴州

黒水河

貧□国、○鎮海禪林寺、ラマ僧出つ。欽法国。

宝象国、烏難刻、連遲国、西□国、祭賽刻国、比丘国、滅法国、鳳仙郡、玉華州、金平府、

34 年 1 月 19 日

○我建入蔵願 必至布達拉
斯願不成功 誓不帰本土

20 日

我於長旅行 不為大智徳
普清腐敗世 誓不帰本土

21 日

我至興新宗 名声超萬邦
若不信帰越 誓不帰本土

22 日

我帰本土晴 勿雜念慧行
何求欲状楽 唯願天人師

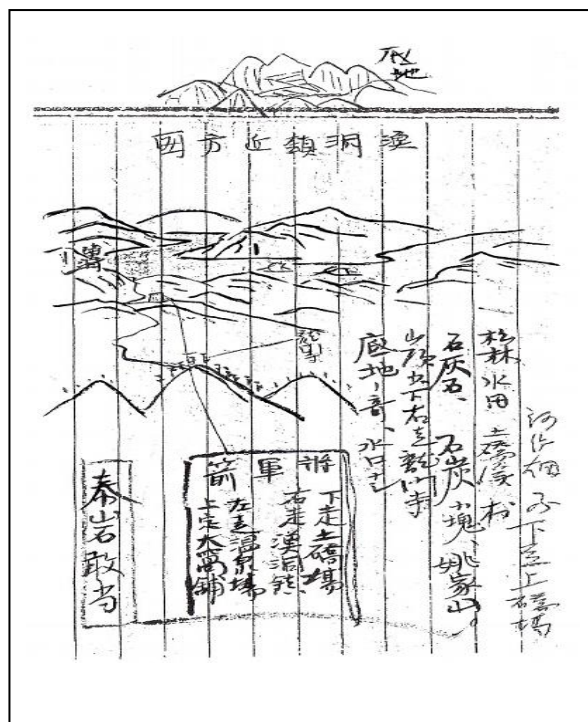
23 日

大聖釈迦教 普及方維国
消除邪惡妄 廣濟世災難

24 日

又放智眼光 滅世昏盲闇
閉塞渚惡道 開道善趣門

33 年 1 月 7 日	第 17 回上申	打箭炉
2 月 25 日	第 18 回上申	打箭炉
5 月 17 日	第 19 回上申	打箭炉



7月28日	第20回上申	蘭州
11月9日	第21回上申	重慶
11月12日	第22回上申	重慶
34年1月1日	第23回上申	重慶
1月17日	第24回上申	重慶

○全蔵 70 城 4 江 5 河

頭蔵	9 城
前蔵	31 城
后蔵	17 城
底蔵	13 城

○官報 33 年 12 月 18 日

西藏拉萨状況(50 字詰め 150 行)

1. 廣東人ヤアートンを経て日本及洋品を輸入す。
2. 雲南より茶を輸入す。
3. 四川、雅州茶等 1、200 万円の輸入。
4. 甘肅、松耳石、茶を輸入す。
5. 西伯利、毛皮、真珠等輸入。
6. カシュミル、砂糖、乾果物入る。
7. ネポール、鉄米入る。
8. アッサム、香料、綿布入る。
9. 輸出品、羊毛、麝香、砂金(リタン、チャムト、ラリ)、紅花、カンランミ、慶茸、紫草。
黒白番、肉桂、普甞口、絨毯、仏像、礪沙。
10. 商人、纏頭国人、口嘩人、四川、雲、口、陝、江西、雲人、楊影胡子、5、600 万両、
廣東人、鐘某、周某、四川人、王天龍、蔵内に生まれる。
11. 商業、習慣、信あり、婦女、口するあり。
12. 拉萨人口、ラマ 2、30 万支那人 2、3 千人、俗人 2、30 万人、計 6、70 万人。
13. 重要商業街、大桅竿、二桅竿、講圣台、ラッサ周囲 15、6 清里、3 日、シキムより 17、8 日呈。
道中九龍、牛頭山、牛皮船、ダライラマの寺 1 里の外にあり、又尼寺あり。河辺柳林廣さ百歩。
14. 商業季節 夏時なり。必嘩人、英人と同様なれども額上一紅点あり。
15. 商業要路、ニヤートン通、コエマ盜賊チャパ強盜。草野地、1 日里程 7、8 里、蔵人之を扱う。
 1. ラッサ ヤートン 17 日
 2. ラッサ 甘肅西寧 6、70 日
 3. ラッサ 打箭炉 6、70 日
16. 通貨 ルーピー 半斤 半々斤。
17. 米産せず。雲南、阿敦子、定日口入る。
 - 1 両 2 匁 ラッサにて 12 両
 - 1 斗を 1 ケイ 1 升を 1 パイ
18. 油、種、石炭あり。
19. 酒、土人の造麦酒。
20. 肉類、牛多處あり。魚は食せず。其他、柑、葡、梨。

21. 風俗、衣服、佛壇、葬、水、火、野。一婦多夫、不生産人多。支那伏りも日本服に似たり。
松柏の薪、糞を多。
22. ダライラマの権、蔵王、大臣の上にあり。
23. 婚姻、早婚ならず、15、6 ㉔ 20 前後。
24. 文字、教口わりに届く。
25. 経文、建築、石を用ゆ。
26. 病疾、眼病、痘。
27. 刑罰、毒殺、傳舟、投水。
28. ヤートン関門、路票を要す。外人を入れず、通せば 50 両を要す。
29. 気候、午前北風。午後静まる。雪少なし。ヤートン辺毎日地震あり。雷あり。

東邦近世史 1 月 25 日読

(○華陽国誌 3 冊 四川華沿革説古代作)

○塔爾寺 康熙 55 年の前、裏塘生の第 6 世真達頼を奉して青海、蒙古に居らしむ。

噶爾蔵嘉口緒居る。此寺宗喀巴の胞衣を瘞口口地にして黄教の祖寺なり。

雍正元年夏青海和碩親王 達什巴図の子羅^{ロボツアンタンチン}ト 蔵 津は先人の覇業を回復せんとして陰に
ジュンガルの策妄に通じ口を謀る。始めは西藏に清軍に従ひて入り此に諸事を口ひ盟約を
定め清に通ずるものを伐口具青海の塔爾寺の大ラマを擁して遠近を風靡し、其衆 20 万、
西寧を口して牛馬を掠め官兵に抗す。川峡及四川提口之を征す。ラマをば西寧の東北郭隆
寺にせして斬首 6,000 又寺を口く。2 月兵を青海に進しめ。哈達河の賊 2,000 を口なり。
急行 3 月平き、3 年、青海 29 旗に編し、青海、蒙古と云う。

34 年 1 月 25 日

日月亮不及	珠玉光不勝
天上天下間	救主獨照耀

26 日

佛建建法国	多宝万善境
極樂真理界	是獅子吼臺

27 日

恭養前世佛	順奉古聖教
願行悉成滿	得萬世界尊

28 日

如佛無礙智	如釈迦滿德
願戒亦如此	等聖天人師

2 月 1 日

世尊我果遂	如斯願滿足
大千界應動	華雨當降下

2 月 2 日

時地吹雪下	天樂奏空中
-------	-------

干時 2 月 2 日㉔大に風起こり 3 日朝雪片舞下る是れ必ず天の兆ならんと深く信す。干時 3 日朝、温度 1 度なり。

天番普薰口	汝必成覺士
-------	-------

○ワスコ、ダ、ガマ、Vascoda Gama 葡 1,450 生る。

印度に航海路を発見す。

○マゼラン 152 年 西班 葡す。世界一周す。(西班王の補助により周航す)。※マカリヤエンスのこと。

1 ○ 神道本局の下に左の数教あり。

12 天理教会

13 金光教会

14 丸山教会

2 ○ 大社教(出雲派

3 ○ 大成教 其下に左の数会あり

× 御獄教の一部

15 蓮文教

4 ○ 御獄教

5 ○ 神習教 此の下に左が属す。

× 御獄教の一部

6 ○ 神道修成派

7 ○ 神道黒住派

8 ○ 扶桑教(元の富士講)

9 ○ 神理教

10 ○ 禊教(元のトホカミ講)

11 ○ 実行教(元の富士講の一種)

16 ● 神宮奉齋会(元の神宮教を宗教外に卓立す)

世界に於ける佛教徒

1. 宗教革命の時機 高楠博士

2. 新仏教徒

3. 宗教学上の仏教 井上哲次郎博士

4. 哲学上の仏教 井上博士

5. 歴史上の仏教 村上博士

6. 道德上の仏教 雲照律師

7. 梵学の新研究 南條博士

8. 仏教国の新探検

9. 仏教徒の事業

10. 本山政論

外交事報 35 号 33 年 12 月 10 日

○ 西藏の使節到来 法王ダライラマの下に四大修報あり、コンバラマと云う其首席者なるアクサハラ
ンバ、アリバン、ドルチェフバ、ダライの使節としてラサ府より派遣せられ 10 月リヴァヂヤに着し、
16 日、露席に謁見す。万国漢法匠学者の有名なるバドマエフ教授は元蒙古出身。今 1 年半前チベッ
ト及蒙古に派遣せられ、路帝の進物を以てダライラマを訪問す。其返礼なるべし。ろの威を西藏に加へ
んとす久し。故に之に政治上の意味を以てせり。ノヴヌスチーの報に由れば使節は謁見の席上長時の演
舌を為し、其意は英人の侵略に対し西藏を大国の保護の舌に置かれしことを希望すと云にありと同時、

ろ都に駐在清国公使楊儒もリヴァヂヤに居りれと云う。

- 婆羅門 (1) (五)御庵陸東より西
- 仏教 (4)
- 拝火教 (7)
- 猶太教 (2)
- 耶蘇教 (5) (二)葡萄牙 海 西より東 (三)露国陸西より東 (六)米海
- 回々教 (8) (一)成吉思汗 陸 東より西 (六)弗陸
- 儒教 (3) (五)支那海東より西
- 道教 (6)
- 神道 (9) (四)日本海東より西

徳退国、智退国、獅子国、(大象国)、巨鯨国、

12月12日 発会

- 帝国東洋学会 梵漢字書、梵漢字編輯、常葉井氏等発起

編輯事業、東洋の原語、文学、宗教、哲学、歴史、地理、神話、俗語、工芸、美術。

- 甲口教学費 150,500 円、乙 經常費 14 4,400 円、予備 9,000 円、計 311,900 円也。34 年予備。

- 東洋学会、印度学芸叢書編纂、東洋各国仏教史編纂、辞書編纂、原本編纂、原訳比較考究、
質疑応答、高橋督覧、曲籍出版

永垂萬古

同結善縁

- 温泉の八景 明治 34 年 1 月 31 日撰之

1. 大温泉 毛溪河辺にあり、人家 2,30 戸。宿屋 3 戸、包席 1 戸。男女の温泉あり。其上に温泉寺あり。
2. 小温泉 大温泉の下流 5 清里の所にあり。畑中にて家なし。
3. 大石橋 大温泉に入る處、毛溪河に架する。五眼石橋乾隆年中に之を條す。
4. 古井山廟 大理
5. 太鼓坪 温泉の対山、松あり、京の東山の風景あり。
6. 石盤瀧 大温泉の上流。3 清里にあり。4 段となる。風景最佳し。
7. 白鶴林 石盤瀧を更に上りゆけば、左方の松檜の木々の林なり。
8. 仙女洞 大温泉の下方 1 清里にあり、洞乳甚佳あり、入り 30 間江、島の神竜洞と同じ。

- 温泉近方の八ヶ所 1. 老厰。2. 六角厰。3. 界石舗。4. 魚洞鎮。5. 土橋子。6. 李家陀。7. 大渡口。8. 溪口。9. 回鷺。10. 苦竹舗。

- 西藏と露国 東邦協会報告

魯国都方外務省への報告。魯は蒙古の医師を用い西藏ダライラマに通す。贈品を受領し其返礼としてラマを魯都に使はし、親交せんと通ぜりと云う。1 月末の話なり。英女王一週□□すと。

- 東邦協会 35 号(33 年 12 月分)以上記事。

- 桑原の中等東洋史
- 福島の新報兵備第三報 新疆のこと。
- 東洋今国史(各国史)大槻氏着。朝、安、暹、印、波、緬。
- △ 12月28日、朝日新聞、西藏と露国。魯新聞曰く、西藏

法王施設渡露の風評を打消し、曰く英人は取らんとする国をも英領と思惟なり。之を喜ばざれば遂に征す。露は中亜細亞遠征を試み、英国をして一刻も枕を高くして子せしめず、印度も早晩、露領たるべしと驚かせり。

今度西藏法王の一等ツアニア、ハンプなるアホロンブ、アルワンドルデン師の来着は英の恐ろす。露国士報、ロボロウス6年前、西藏に赴き口国有司と交際を結び2通の秘密書簡は西藏のホゴに関する事件を認めたるものにて西藏近方の口国衛所に配達すべきものなりし、之は英人の為に発見せられカリカタの記録書に保存さる。又ラマ教に精通せる。露都のパドマエフ博士が西藏の中心フラツス市へ出発し為に西藏は露国の保護を乞うに至れりと。哥薩克兵の西藏を横断の印度に進むは数年を出ですと想像するにあり。

僅に西藏が露に転らんとするは清国禍乱か動機なり。露の支援を得んと。するは自然の口なり。露国か中亜の保護国ボカラに對す政略當を得明正あり。西藏ホガ露に口られんとするは之の爲なり。外新聞は露の懷柔策を以て、領土口食とす。満州に兵を配し、西藏に外交報を派遣して着々計画を実行しつつありと風評に狼狽せざるべし。此等の風評は寧ろ吾等に好意を表するものなればなり。西藏に意ある如く評するは無限なりと。

○1 月			青
24 日	木		5
25 日	金		6
26 日	土		7
27 日	日		8
28 日	月		9
29 日	火	温泉行。	10
30 日	水	温泉界石行。	11
31 日	木	温泉方李家沱を経て帰る。	12
○2 月			
1 日	金		13
2 日	土		14
3 日	日		15
4 日	月	本山へ書面出す。小林久太郎、水野 2 通書面着す。	16
5 日	火		17
6 日	水		18
7 日	木		19
8 日	金		20
9 日	土	上海電に接す。	21
10 日	日		22
11 日	月	紀元節	23
12 日	火		24

13 日	水		25
14 日	木		26
15 日	金		27
16 日	土		28
○11 月			9 月
1 日	木		10
2 日	金		11
3 日	土		12
4 日	日	着慶。	13
5 日	月	新聞読む。	14
6 日	火	新聞読む。	15
7 日	水	出街。	16
8 日	木	○本山へ書面出す(報告)	17
9 日	金		18
10 日	土		19
11 日	日		20
12 日	月	○本山、○南條、○国元、○杭州へ書面出す。	21
13 日	火		22
14 日	水	出慶に決す。降雨中止。郭氏来。	23
15 日	木		24
16 日	金		25
17 日	土	江北行。	26
18 日	日	打電炉城。	27
19 日	月	○書東炉城へ出す。○石川へ書面出す。	28
20 日	火		29
21 日	水		30
22 日	木	下元、通遠門外非常雑踏	10 月朔
23 日	金	通遠門外山上	2
24 日	土	南門外	3
25 日	日	嘉陵江辺	4
26 日	月	神仙	5
27 日	火	雨	6
28 日	水	雨	7
29 日	木	観音巖	8
30 日	金		9
○12 月			10 月
1 日	土		10
2 日	日	江北、朝天門散歩。	11
3 日	月	降雨、○寺本、○水野、○上海。	12
4 日	火	降雨。	13
5 日	水	降雨。	14

6日	木	降雨。	15
7日	金	降雨。	16
8日	土	古本屋行。求2本。晴天。	17
9日	日	曇天。	18
10日	月	後蔵喇嘛2人来る。○国元へ書面出す。新聞着読日本。○曇。	19
11日	火	読朝日新聞。曇。	20
12日	水	晴。支那疆域沿革脱稿。	21
13日	木		22
14日	金		23
15日	土	蜀故2冊。蜀水攷2冊。	24
16日	日		25
17日	月	入蜀紀、吳船録、天下路程。	26
18日	火	新聞着。読日本及朝日。	27
19日	水	出街。製旅行図、經国美談前篇読了。	28
20日	木	雨。丹噶尔図。	29
21日	金	蒙古新疆調写。	30
22日	土	雲南路対照写。夜、井(土川)氏宴会行。商局等。	11月朔
23日	日	学問思想の変遷。晴。荷着。書面10本。	2
24日	月	朝方語学を始め又張氏へ日語を教ゆ。10奇撰。阿多8名刺送る。	3
25日	火	朝、語学。新聞着。日本、夜雨物語1号。	4
26日	水	○受取、打箭炉朱氏へ書面出す。元史調。夜雨物語2号。	5
27日	木	堺、成田、中村、濱田、本山以上4通書面認。蘭州図。	6
28日	金	語学。兵操を見る。長安兵を百捧す。昨獨船沈の報あり。	7
29日	土	語学。書面出したたむ。	8
30日	日	両路口散歩。書面認。語学。	9
31日	月		10
○34年1月			
1日	火	本山23、寺本、南條、井上、国許、堺、中村、成田へ書面出す。	11
2日	水		12
3日	木		13
4日	金		14
5日	土		15
6日	日		16
7日	月		17
8日	火		18
9日	水		19
10日	木		20
11日	金		21
12日	土	温塘行。	22
13日	日	漁洞を経て帰る。	23
14日	月		24
15日	火	書面来、松林、山崎、父、(静)、登。	25

16 日	水	26
17 日	木	(四)本山 24、南條(登)、松林へ書面出す。27
18 日	金	28
19 日	土	29
20 日	日	12 月朔日
21 日	月	国許、水野へ書面出す。2
22 日	火	3
23 日	水	4

【解説】

「渝」とは、重慶を表す中国語である。能海は、明治 32 年 1 月 7 日から 4 月 1 日まで 3 か月間、重慶滞在中に書き始めたのが、『在渝日記』である。最終の記述は、34 年 2 月 2 日の漢詩である。

冒頭に玄奘三蔵、難産道宣律師、慈恩大師、義浄三蔵の高僧の略歴を記述し、中国各州の農業事情を能海が日本で経験した事を基準に客観的に各州の農業の現状を報告している。

第一次、第二次探検中に書き留めた記録は、清代疆域沿革、西藏研究倶楽部、甘肅一班、甘肅論目次、思想の変遷、西藏拉薩状況、温泉の八景などが含まれている。

「西藏研究倶楽部」は、国の予算で海外留学生の派遣をと述べている。そして、西藏人を受け入れ、西藏経文翻訳・研究・出版事業を実行する組織を考究していた。

「思想の変遷」は、9 項目に分けて、自身の発達過程を客観的に自己評価しており、「西藏文研究」が最も大切であると結論づけている。「甘肅論目次」では、10 種類、64 項目のテーマ表記している。「温泉の八景」は、能海寛が温泉好きであったことから自身が中国国内で入湯体験・見聞したことを 34 年 1 月 31 日に記録している。

無事帰国出来た暁には、「世界に於ける佛教徒」の改訂版を構想していたことを考えていたことが分かる記述が記されている。高楠順次郎博士、井上哲次郎博士、井上円了博士、村上専精博士、雲照律師、南條文雄博士と共著を企画して、自らは、「新仏教徒」、「仏教国の新探検」、「仏教徒の事業」、「本山政論」を書き上げる計画が読み取れる資料である。(文責・隅田正三)